

印刷女子 交流ツアー

開催レポート ver. 102 in Label Forum Japan 2026

2026年10月16日（金）、東京ビッグサイトで開催された「Label Forum Japan 2026」にて、Girls Who Print Japanによる「印刷女子 交流ツアー」を実施しました。

今回は、ラベル・パッケージ業界の最新技術や市場動向を学びながら、企業や職種を越えた交流を深めることを目的に、8社の展示ブースを訪問しました。

各社では、デジタルラベル印刷、加飾・後加工、自動化・省力化、環境対応、新しいビジネスモデルなど、多彩な技術やソリューションをご紹介いただきました。

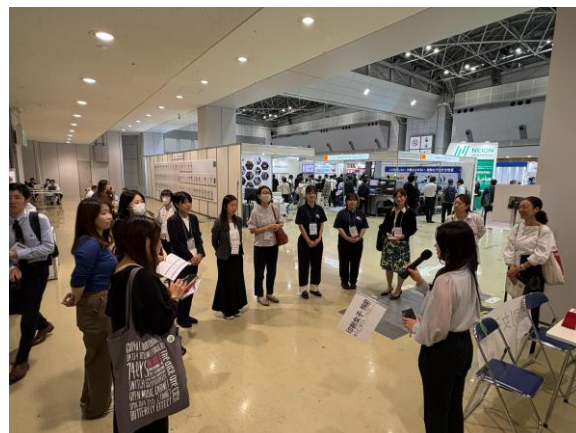
実際の印刷サンプルを手に取り、各社の担当者から直接お話を伺うことで、ラベル業界の新しい可能性に触れる貴重な機会となりました。

Youtube → <https://youtu.be/hc2FbD3dlw8>

“見るだけの展示会”から、“学び、語り、つながる展示会”へ。

今回も、印刷女子ならではの交流を通じて、新しい発見や出会いが生まれるツアーとなりました。

ご協力いただいた出展企業の皆さま、ご参加いただいた皆さま、本当にありがとうございました！

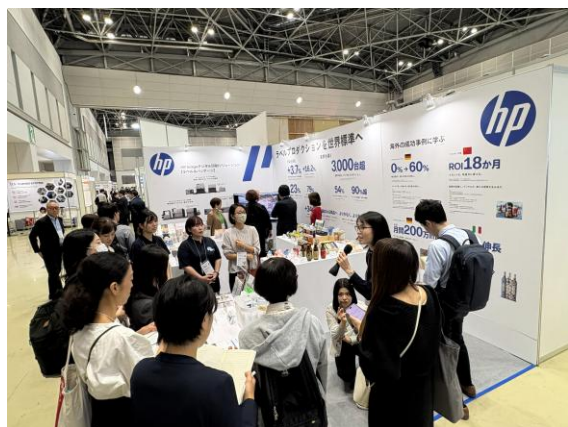


ご訪問した企業様

01 日本 HP	05 ブラザー工業
02 エプソン販売	06 大阪シーリング印刷
03 メッセ・デュッセルドルフ・ジャパン	07 SCREEN グラフィックソリューションズ
04 コニカミノルタジャパン	08 兼松

日本 HP 様

デジタル印刷が広げる、ラベル・パッケージの新しいビジネス



日本 HP のブースでは、永嶋ゆりさんが「ラベル業界の未来はこんなに面白い」と感じてもらうために、身近な商品の話から説明を始めてくださいました。アメリカでは年間約 3 万もの新商品が登場するといわれ、商品サイクルはますます短くなっています。地域限定品やコラボ商品などが増えるなか、ラベルにも多品種小ロット、短納期、デザイン変更への柔軟な対応が求められています。

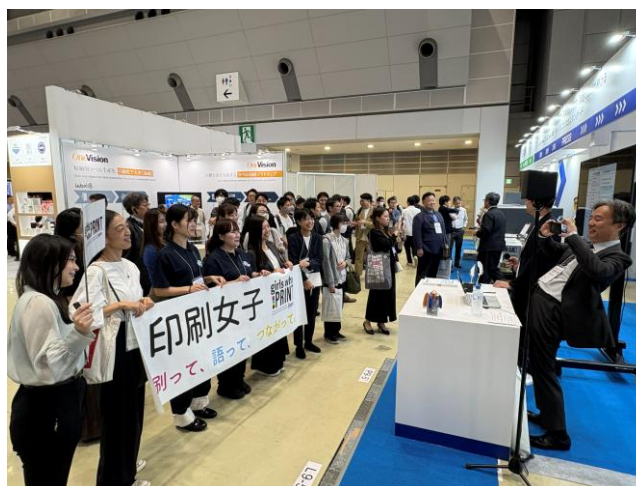
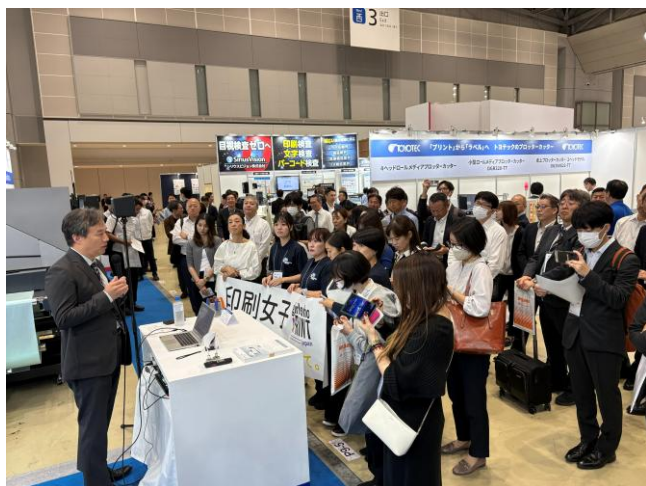
そこで紹介されたのが、HP Indigo によるデジタル印刷の可能性です。ブースには、ラベルだけでなく軟包装やカード、ステッカーなど、実際の印刷会社が手がけた多彩なサンプルが並んでいました。永嶋さんご自身

の名刺もラベル仕様という遊び心のある演出で、デジタル印刷の自由度を身近に感じられました。なかでも興味深かったのは、バイク販売をきっかけにステッカー事業へ展開したスウェーデンの「StickerApp」の事例。Web からオリジナルステッカーを注文できる仕組みは、印刷が新しいビジネスに変わる一例です。

さらに、世界各地の印刷会社が共通のデータや設備を活用して連携し、現地でラベルを製造する可能性にも言及されました。設備の効率化にとどまらず、企業同士のつながりや、新しい市場への挑戦を支えるデジタル印刷の役割を学ぶ時間となりました。

エプソンジャパン様

アナログとデジタルの強みを生かす「守りと攻め」の経営



エプソンのブースでは、SurePress L-4733AW を導入した大阪の丸紀印刷・金光雅志社長による特別講演を聞きました。テーマは「SurePress で拓く『守りと攻め』のハイブリッド経営」。アナログ印刷の経験豊富な金

光社長が、「守り」「攻め」「人」の3つの視点から、デジタル印刷を現場でどう生かしているかを紹介してくださいました。

「守り」の具体例は、高価なホログラム原紙を使うステッカー。従来のオフセット印刷では段取りで約 170m の原紙を使うところ、SurePress では約 54m に抑えられるという試算が示されました。段取り時間も約 60 分から約 20 分へ。インク代だけでなく、損紙、製版、準備時間まで含めた比較が印象的でした。

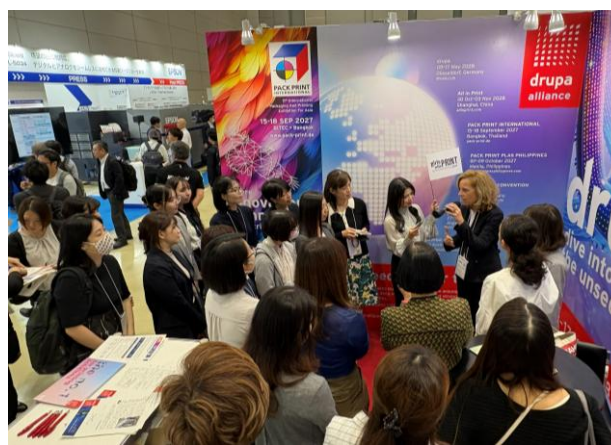
「攻め」では、特殊なデザインや小ロット、可変印刷など、これまで受けにくかった仕事にも挑戦できる点を紹介。

「人」の面では、測色器や色管理機能を使って熟練者の技術を数値化し、再現しやすくする取り組みも語られました。金光社長は、生成 AI を使った自社の工程管理システムづくりにも取り組んでいるそうです。

アナログ印刷の長所を残し、デジタルがその苦手な部分を補うという考え方から、双方の強みを生かす実践的な経営のヒントをいただきました。

メッセ・デュッセルドルフ・ジャパン様

drupa 2028 へ！ 世界の印刷女子とつながる未来



メッセ・デュッセルドルフ・ジャパンのブースでは、ドイツから来日した drupa ディレクターの Sabine Geldermann さんが、Girls Who Print Japan の参加者を温かく迎えてくださいました。上海の All in Print China を訪問した直後とのことで、世界の印刷市場の活気にも触れながら、2028 年開催の drupa に向けた構想をご紹介いただきました。

特に印象に残ったのは、drupa を「世界中の Girls Who Print が出会える場にしたい」というメッセージです。Sabineさんは、印刷業界ではまだ男性が多いからこそ、女性の専門性や活躍をもっと可視化することが大切だと強調。創設者 Deborah Cornさんとの連携や、女性たちが交流・発信できるステージ企画の可能性についてもお話しされました。

また、人材不足を背景に、若い世代に印刷業界の魅力を伝える「Young Talents」への取り組みも重要なテーマでした。

続いてシンガポールからの Beattrice Hoさんが、2027年にタイで開催される PACK PRINT INTERNATIONALを紹介。東南アジア各国との交流や、現地で活躍する女性たちとの出会いにも期待が広がる訪問となりました。

コニカミノルタジャパン様

色合わせの負担を軽減する、新型デジタルラベル印刷機



コニカミノルタジャパンのブースでは、新型デジタルラベル印刷機「AccurioLabel 231」を中心にご説明いただきました。商業印刷機で培ってきた電子写真方式のトナー技術をラベル印刷にも活用していることが特徴で、比較的導入しやすい価格帯を目指しているとのことでした。

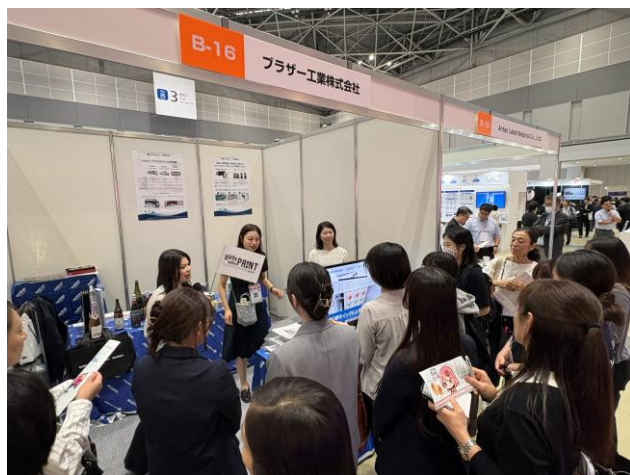
今回の展示会では、この新製品を国内で初めて紹介していました。展示された印刷機を前に、印刷方式の違いや、ラベル業界ならではの課題についてお話を伺いました。

説明で取り上げられたのは、若手人材の採用難と、特色の色合わせにかかる時間です。シール・ラベルには、ブランドのイメージを左右する繊細な色再現が求められます。ところが、多品種小ロットの仕事が増えるほど、印刷のたびに行う色合わせや段取りの負担は大きくなりがちです。今回の **AccurioLabel 231** では、こうした現場の課題に対応するため、色合わせや品質の安定化に関わる機能を強化していると紹介されました。

短い訪問時間でしたが、印刷機の性能だけでなく、日々の色調整を効率化し、経験の差による負担を減らしていくことが、ラベル製造の生産性向上につながると感じました。少人数でも安定したものづくりを実現するという、業界共通のテーマが見えてきました。

ブラザー工業様

デジタルラベル印刷をもっと身近にする、新しいエントリーモデル



ブラザー工業のブースでは、グループ会社 Domino が展開するデジタルラベル印刷の新しい提案を伺いました。今回紹介されたのは、アジア市場を意識したエントリーモデル「Domino N410」。大型機の実機展示はなく、今回の機種は参考出品という位置付けでしたが、印刷サンプルを見ながら、デジタルラベル印刷をより導入しやすくする考え方を説明していただきました。

N410 では京セラ製のインクジェットプリントヘッドを採用し、インクは CMYK に白を加えた 5 色構成。上位モデルと比べて印刷速度や機能を絞り、価格と性能のバランスを重視しているとのことでした。日本市場

での展開については、今回の展示会で来場者の反応も参考にしていきたいというお話でした。かわいらしいステッカーのサンプルからも、さまざまなデザインへの応用がイメージできました。

また、ブラザーはプリンターだけでなく、ミシンや工作機械など幅広い製品を手がけていることをご紹介いただきました。今回の提案からは、従来の設備投資に踏み切れなかった印刷会社に、新たな入り口を用意したいという意図もうかがえました。高性能な機械を追求するだけでなく、使い手の選択肢を増やし、デジタル印刷の裾野を広げようとする取り組みが印象的でした。

大阪シーリング印刷様

ラベルの新しい機能と、剥離紙のリサイクル技術



大阪シーリング印刷のブースでは、OSP グループの研究開発担当者から、開発を進める 2 つの技術をご紹介いただきました。まずは「筆記・印刷可能な糊付きサーマルレジロール」。剥離紙を使わないライナーレスラベルは廃棄物を減らせる一方、一般的な表面処理ではインキをはじき、手書きしにくい課題があります。今回の技術ではシリコーンとは異なる材料で離型性を確保し、油性マーカーでもきれいに文字を書けるサンプルを見せていただきました。文字を追記できれば、店舗や現場での使い勝手も広がりそうです。

もう一つは、使用後の剥離紙を再資源化する「離型剤脱離技術」です。従来、剥離紙に残るシリコーンは紙のリサイクル時に障害となることがあります。そこで、紙の基材と離型剤の間に特殊なプライマーを設け、水を使う工程で分離しやすくする仕組みを開発。再生した材料から紙ファイルや封筒、ラベルを試作しているとのことでした。

参加者からは、プライマーの位置や離型剤の剥がし方について質問もありました。ラベルを「使うとき」の便利さと、「使った後」の資源循環を両立させようとする研究開発が印象に残りました。どちらも、完成した製品ではなく、技術開発の成果として紹介された点にも注目しました。

SCREEN グラフィックソリューションズ様

ラベル印刷から新しいグッズ製作まで、広がる技術と用途



SCREEN のブースでは、ラベル印刷を支える技術から新しいビジネスの提案まで、幅広いサンプルをご案内いただきました。最初に紹介されたのは、フレキシ印刷でインキを均一に転写する Zecher 社のアニロックスロール、印刷と加飾を組み合わせられる Nilpeter 社の印刷機、そしてレーザーカットやデジタル加飾に対応する CARTES 社の後加工技術。印刷の品質と、ラベルの付加価値を高める工夫を学びました。ニスや箔のサンプルは、実際に手に取って質感を確かめられる展示でした。

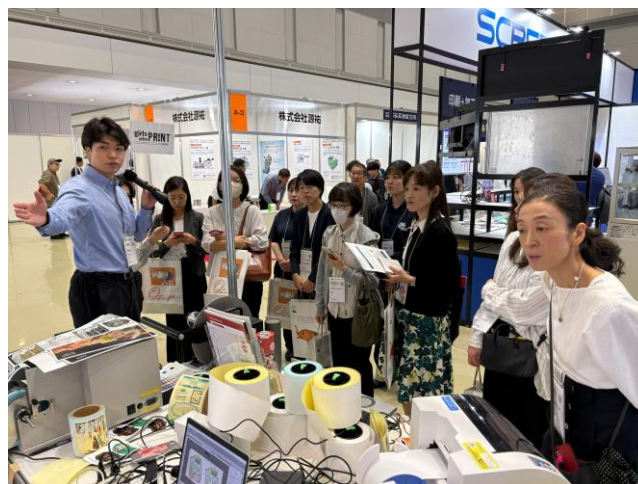
続いて、SCREEN の UV インクジェット印刷機「Truepress LABEL 350UV SAI」の活用事例を見学。アクリルキーホルダー用の絵柄やトレーディングカードのパッケージなど、ラベル印刷機をラベル以外にも活用する

発想が新鮮でした。さらに、エアゾール缶、チューブ容器、化粧品・日本酒・医薬品向けラベルなど、実際のお客様のサンプルも紹介されました。

最後は、小型トナー印刷機 Valloy「BIZPRESS 13R」と、刃型不要のカッティング機「ROSE」を組み合わせたコンパクトな製造提案へ。多品種小ロットや短納期への対応など、規模や用途に応じた多彩な選択肢を感じるブースでした。

兼松様

ラベルの製作から貼付まで。新しいドライコート技術にも注目！



最後に訪問した兼松のブースでは、ラベルを「作る・印刷する・貼る・仕上げる」という幅広い工程に対応する製品をご紹介いただきました。まず目を引いたのは、印刷とカットを1台で行えるインクジェットラベルプリンター「LX610」。グループ会社が開発した「LabelCraft」と組み合わせれば、QRコードをスマートフォンで読み取り、その場でオリジナルラベルを作ることができます。

続いて、ボトルや箱などにラベルを効率よく貼る小型ラベラーや、ベルギーXeikon社のドライトナー方式デジタル印刷機「Ecolyne」のサンプルを見学。ラベル用の専用メディア「MEQLUA」についても、印刷方式に合った材料を使う重要性をご説明いただきました。

特に興味深かったのは、開発中の「ドライコート」技術です。通常のラミネートと異なり、すでに抜き加工されたラベルにも、フィルムからニスなどのコーティング層を転写できるというもの。実際のサンプルでは光沢の違いも確認できました。参考出展の段階ですが、ラベルの加工工程に新しい選択肢を生み出しそうな提案でした。プリンターだけでなく、材料から最後の仕上げまでまとめて相談できる、商社ならではの展示が印象に残りました。